令和２年度　福島大学　人間発達文化学類　芸術・表現コース
推薦入試Ⅰ
小論文

## 問　題

以下のA(音楽)，B(美術）から，一題を選んで論述しなさい。
選んだ問題の記号を，解答用紙の【　】に必ず記入すること。
（注意事項：解答用紙の１マスを１字とする。句読点も，行末の場合を除き１字と数える。算用数字やアルファベットは，１マスに２文字としてよい。）
＊原文が常用漢字以外のところは，一部「ふりがな」をふってある。
＊出題に当たり，原文の一部を変えている。

**A.　次の資料は，片山杜秀著『ベートーヴェンを聴けば世界史がわかる』（文藝春秋社，2018年）から一部抜粋したものである。これを読んで，下の（1）（2）の設問に答えなさい。**

音楽は文学や美術よりも演奏や受容の形態に左右されやすい芸術であること。その意味で音楽史は「作り手」よりもむしろ「受け取り手」を知らないとよくわからないものになってしまうこと。そのへんを意識しないと音楽史は面白くもおかしくもありませんけれど，その「受け取り手」の変化として歴史をみるうえで，もうひとつ押さえておきたいのは，クラシック音楽が「娯楽」であるとともに，「権威」でもあるという二面性をもっているということです。

今はすっかり神通力を失ってしまいましたが，かつてクラシック音楽といえば「ハイクラスな教養」の代表でした。日本でも，高度経済成長期あたりまでは，ボーナスでステレオとクラシックのレコードを買って，懸命に「教養」を身につけようとする若手・中堅サラリーマンがいましたし，「たまにはコンサートでも行って勉強したまえ」などと「指導」する上司もいたものです。クラシック音楽は「よくわからないけど，なんとなくありがたいもの」，「知っていると，周りに差がつけられる（気がする）もの」，ステータス・シンボル，すなわち権威の象徴だったのです。

もちろん美術館で泰西名画を鑑賞することも，本棚に文学全集を並べることも，「教養」への憧れであり，ステータス・シンボルだったのですが，クラシック音楽はさらに一段敷居の高い（偉そうな感じがより強い）差別化の装置だったといえるでしょう。（中略）

この権威性はどこから来るのでしょうか？

実は，クラシック音楽は，そもそもの成り立ちから「権威」を示すための仕掛けとして機能していた面があるのです。（中略）

ヨーロッパの中世においても，教会の音楽は，民衆が楽しんでいる音楽とはまったく別の価値観を示すものでした。それは聖と俗，天上と地上のへだたりでもありました。そこでは音楽は，教会の権威，もっといえばキリスト教の神の権威を象徴するものだったのです。

さらに時代が進み，王侯貴族が主役となると，権力者である王が権威をも握ることになります。王（宮廷）が文化の基準，趣味の善し悪し，教養のあるなしのスタンダードとなるわけです。そのなかで，音楽もまた，王侯貴族の文化的権威を高めるものとなります。モーツァルトがヨーロッパ中を旅したのも，各地の宮廷への就職活動のためでした。（中略）

近代になると，市場経済が発達し，お金を儲けた市民階級（ブルジョワ）が台頭してきます。このブルジョワたちが何を求めたかといえば，王侯貴族の文化を模倣することでした。

新興の市民層はまだ自前の価値基準を持ち得ません。文化・趣味の基準，美しいもの，高級なものの尺度は，王侯貴族にありました。それを身につけたいというのが，市民階級の欲望となるのです。

近代化が進むと，市民のなかでも中流にいた人々が，上流階級を目指すことになります。社会全体が底上げされ，豊かになってくるときのエネルギー源のひとつが，ステータス・シンボルに対する憧れです。王侯貴族が楽しんでいた芸術を，自分たち市民階級も理解したい，楽しみたい――。そこで音楽の娯楽と権威が結びつくのです。

そのエネルギーの爆発は18世紀半ばにはじまり，19世紀にピークに達したといっていいでしょう。ベートーヴェンをはじめ，今も演奏され，多くの人に聴かれるクラシック音楽のほとんどは，この百数十年に集中していますが，それは偶然ではありません。

市民が主役となることで，クラシック音楽は，それまでとは比べ物にならないほど膨大な「受け取り手」を獲得します。大都市にはオペラハウスなど巨大な劇場が作られ，そこに多くの聴衆がつめかける。また豊かになった市民たちは，かつての王侯貴族を倣って，自らも楽器を手にし，合奏や合唱に精を出します。音楽は社交のツールともなり，音楽を愛好するサークルに属することが立派な市民としてのアイデンティティを強化することにもなります。

そうした新しい顧客のために，音楽家たちは楽譜を出版したり，ピアノやヴァイオリンの教師となったり，演奏会のプロデュースをしたりするようになります。クラシック音楽は「娯楽」としても，ひとつの産業にまで発展するのです。そして，さらには音楽家を養成するための学校なども設立されることで，自ら新たな権威を生み出すことにも成功します。

こうしたステータス・シンボルとしてのクラシック音楽への憧れは，遠く日本にも波及します。その端的なあらわれが鹿鳴館ですが，明治日本の場合は，そこに「西洋へのキャッチアップ」という課題が結びつきます。一般の人々が上流の文化を真似して，社会的にも上昇を果たすという「立身出世」の側面と，西洋化を進める「文明開化」の側面が重なって，クラシック音楽の権威性がいっそう高まったともいえるでしょう。

このように，音楽の「受け取り手」である教会，宮廷，市民層の変遷こそ，まさに政治，経済，社会の歴史にほかなりません。つまり「クラシック音楽を聴けば，世界史がわかる」わけです。

**(1)　上記の文章を，著者の意図に注意しつつ，300字以内に要約しなさい。**
**(2)　著者は，クラシック音楽について下線部のように「今はすっかり神通力を失ってしまいました」と述べていますが，あなたはどう考えますか。自らの知見を踏まえつつ，700字以内で自由に論述しなさい。**

B. 次の資料は，北川フラム著『ひらく美術 ――地域と人間のつながりを取り戻す』(筑摩書房，2015年) から一部抜粋したものである。これを読んで，下の (1) (2) の設問に答えなさい。

**参加者の多種多様さが面白さをつくる**

大地の芸術祭[1]には多種多様な人々が参加しています。作家もいろいろな国から，異なったタイプの人が加わっていますし，学校のゼミが母体になっているのもあります。

また地元の人は主に集落単位で運営の手伝いに入っていたりしますが，サポーターの核になっているのが，「こへび隊」といわれている県外の人々の存在です。

もともとある組織でもないし，決まりもない。運営は苦労と熱情のアマルガムです。東京の学生が中心で第 1 回芸術祭開催年の冬から地元に入り，紆余曲折し，中心の人たちが変わりながらもその精神が引き継がれながら現在に至っています。しかし，なにぶん遠くからの参加であり，前回ぐらいから地元の人々の比率がサポーターのなかで高くなってきています。松代の年輩者が中心の「案内子隊」や「アートネット川西」や津南の「もりあげたい」のほか，もともとあった地域のグループで深くかかわっているところもあります。

そしてこの多種多様さが芸術祭の面白さをつくってきているといえるでしょう。芸術祭は多くの人たちの手伝いによって運営されているのです。この地元の人々とどう関わり作業を一緒にやるかが，最近の「こへび隊」の課題のなかでも大切なことになっています。また海外からの申し込みも増えていて，それらは長期にわたる参加者です。これも「こへび隊」が対応するのが望ましいのですが，どうなっていくのだろうかと興味と心配のあるところです。

芸術祭は，田舎で行われる，現代アートが中心の，お祭りでありたい。これが当初からの主軸です。しかし国際社会のなかでの，日本の政治的，経済的な迷走，過疎のなかで，どうやって田舎の人口減をストップし，農業を中心としたものづくりをし，生産力の低下という課題に対応するか？　という根本的な問題があります。それらを解決するための旗，3 年に 1 回の里程標として芸術祭を考えてきました。

美術には，この地域環境の激変と文明の危機のなかで，人間の生理が自然，土地や文明とどう関係付けられるか問われています。作家一人ひとりにとっては無自覚なことが多いながらも，全体としては「越後妻有のアート」としての特色と可能性ができてきて，この独自さが知られだし，美術の大きな可能性のありかとして海外でも興味をもたれだしてきています。人と人，人と土地をつなぐ媒介性の働きがクローズアップされてきているのです。その媒介性が，祭りが持つ性格と深く関わっているような気がします。もともと山に囲まれた中山間地の農業地帯では，祭りは重要な意味をもっています。祭りはキツい農業労働や豪雪地で生きていく大変さがあるゆえに盛んでした。

祭りは，場所によっては無礼講的な要素をもっていたし，当然，自然そのものの表れとしての神様への信仰と密接に関わっていました。それは爆発し，人間の五感，生理を解放させる，いわば宇宙誕生時のダークマターのような，自力で生まれるエネルギーになりうるものでした。

それら祭りがもつような力として，そこの地域に生きる人と美術が媒介となって，都市や圏外，外国の人々をつなげ，地域の自立へのささやかでもよい，明るさをもった可能性の出発になれないかと考えてきました。

**価値観の違いが何かを生んでいく**

最初，「こへび隊」の人々のほとんどは，都市で何をやっているかわからない人々か，あるいは美術に関心を持っている学生の集まりでした。

それに対して妻有の人々は，中山間地で農業をやっているお年寄りです。この世代と地域，ジャンルの異なった人々の出会いが，越後妻有では化学変化を起こしてきました。

何かうまくいかない時にはできるだけ価値観の違う，多種多様な人々が集まっていたほうがよい，と私は思っています。方針を出す時，手間はかかりますが，そのずれが問題点を明らかにし，違った立場からのものの見方ができるからです。

大地の芸術祭は最初は地元では理解されず，不評でした。「これは上からの施策であり，北川が音頭をとって 1 人でひっちゃき[2]になっている」という感じでした。これでは一方的で，YES か NO しかありません。この時あったアドバイスにしたがって，私はまったくのシロウトである学生にサポーターになってくれと誘う，極めて遠い迂回路をとることにしたのです。このズレを活かすしか展望がなかったのです。

今は主力が 1 回毎に入れ替わりながらも，古くからの人も参加する珍しいチーム（と言えるかどうか）になりました。毎回ゼロから組み立てなければならず，本番中は人の数も数十人から数百人というぐらいデコボコなので，毎朝 1 カ所に集まって朝礼を行い，毎夜反省会を開いて翌日のシフトを作るという気の遠くなる作業になります。

開会式オープンの頃にはまだ慣れていないので，ほぼ徹夜のようになります。しかし運営の手間が何かを生んでいくんだという実感があるのです。海外からのロングステイのサポーターもいます。前の 2 回（2009 年，2012 年）は香港大学の学生が多数，交代で参加してくれましたし，彼らは今年は中高生にバトンタッチしています。

その心は，「まだ心身が可塑的なうちに，土や農業にふれるとよい」ということです。しかもこれらのサポーターは他の地域の芸術祭にも参加するのですが，地域や国を超え，世代も違い，ジャンルや好みも違う人たちが芸術祭に集まってくる。ここにグローバル社会における，実体的な素晴らしい可能性があるような気がしています。20 年後，30 年後に彼らがどういう出会いをするか，楽しみです。

注 1 大地の芸術祭…越後妻有トリエンナーレのこと。新潟県南部に位置する越後妻有地域を舞台に美術による地域再生を目指し，3 年に 1 度開催される世界最大級の国際芸術祭。なお，文中に登場する松代，川西，津南はこの地域に含まれる地名である。

注 2 ひっちゃき…しゃかりき，必死

(1)　この文章内容を 300 字以内で要約しなさい。

(2)　地域再生における美術の役割に関するあなたの考えを，資料と関連付けつつ，あなた自身の知識や経験を交え，700 字以内で論じなさい。

# 令和２年度入学試験　　小論文「出題意図」

## （入試情報公開用）

人間発達文化学類　推薦入試Ⅰ　芸術・表現コース

音楽又は美術に関する文書資料を提示し，それに関して1000字程度で論述させることにより，読解力，論述能力，および芸術に関する知識や関心を総合的に見ることをねらいとする。